



## 説教要旨「十字架による栄光」

ルカによる福音書 9章28～36節

イエス様はペトロたち3人の弟子を連れて山に登られました。そしてそこで、イエス様の様子が変わり、服が真っ白に輝きました。そして、同じく栄光に包まれたモーセとエリヤが、イエス様と語り合っているのを弟子たちは目撃しました。

旧約聖書を代表するような2人の預言者とイエス様が肩を並べているこの瞬間をいつまでもここに留めておきたいと願い「仮小屋を3つ建てましょう」と言い出すのですが、そこに留めたいと願ったイエス様たちの姿は、雲に包まれ見えなくなり、そこに「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」（35節）という声が響き、モーセとエリヤはいなくなってイエス様だけがそこにおられたというのです。

この場面はイエス様がモーセやエリヤのことをお払い箱にした、つまり神様との新しい契約を結ぶために旧い契約（律法）を破棄したということではなくて、神様との契約の完成をイエス様が託されたという場面です。それは「イエス様がエルサレムで遂げようとしておられる最期」（31節）によって成し遂げられるのです。イエス様が栄光に輝くのは、惨めな十字架上の死と復活とに深く結びついており、そのことを抜きにしてイエス様の栄光を見つめることはできません。

十字架というのは、罪を犯した者に課される刑罰です。そしてそれを背負うことは、ただただ苦痛でしかありません。その十字架を背負って行ってたどり着くのは処刑場であり、そこで自分で背負ってきた十字架に張り付けにされて殺されるのです。人間の感覚で言えば、この“十字架”と“栄光”とは、まったく結びつくはずのない事柄です。けれども、そこを結びつけるのが復活です。たとえ今、どんなに苦しくても、どんなに辛くても、たとえ死が待ち受けていたとしても、わたしたちはその絶望の先に希望を見いだすことができるのです。なぜなら、主が共にいて下さって、わたしたちの苦しみを、悲しみを、絶望を、一緒に味わっていて下さるからです。ここに本当の“救い”があるのです。

(2023・3・19 説教者：稲垣真実)